

はじめに

そこで、金神が人民に安心を授けてやろうと思ってきたけれども、たまたま信心する者があっても逃げるばかりして、真に心の定まった氏子はこれまでなかった。戊の年(金光大神)は、信心をいだしてから、幾度試してみても心を変えずに神にすがってくる。もう、その方の心は動かぬということを神が認めた。その方の口と姿とを貸してくれ。神が天地の理を説いて、安心の道を授けてやる。(理解Ⅱ類大喜田喜三郎3-2)

一、安心を求めて

1 金吉(正神)の問題

\*「辛抱」「先楽しみ」

一つ、金光正神身上心配すな。三年先、浅尾にて人の用いになり、請待いたすようにしてやる、とお知らせ。五月十九日早々。なんとえらいものじゃ、神のおかげというものは、人に言われるを楽しみに待てい。(覚帳18-6)

\*「神の教えどおり」「神の言うとおりのこと」

一つ、何事も神の教えどおり、直く相守り。安心なり。金光正神へ理解申しつけ。(覚帳18-7)

神の言うとおりにいたせば、わがうちにて浅吉さんと言われて安心のこと。(覚帳18-20-3)

\*神の「立腹」や「気ざわり」

借金のこと申しあげ、二十六日早朝。神様ご立腹なされ、金光大神お断り申しあげ。(覚帳16-13)

ただし「辛抱いたすれば神は見捨てはせぬ」と諭す言葉も。

ばくち借りたのこと、ひひてなしうてなし、ひき破りてしまえと言うごとく、なんぼうやっても尽きん。海へ流すごとく。家内の物やっしまえ、とお気ざわり。(覚帳22-8-3)

\*届かぬ願いと絶えざる願い

\*人助けへの願い。

辛抱いたし、天地金乃神の書付書きためおき、好みの氏子にやり、お神酒をいただかせ、人を助け。[...]今までは、親、神ともにだまし。これから実意を立てぬき。(覚帳18-11-4・6)

難渋な人、痛いことあれば、言うて聞かしてやり、うちへいで拝んであげると申しておき。(覚帳 21-37-5)

正神、心の改め、宝物やる。大神宮のかけ物。人助ける心になり。旧心去り、辛抱いたし。ま一度(もう一度)取り立て。こんど心狂うたら犬猫同行(同様)、人が送りて来て納屋のすみで養いする。[…]私も理解申し。金子不自由なところをことかいて貸せ。こんど心狂うたら、いよいよ手切れなり。病気になりても犬猫同意にいたすぞ。(覚帳 22-14-4~5・7)

人間考えを越えた願いと、厳しい求め(辛抱、犬猫同様)とがセットに。お知らせに加えて、金光大神も重ねての教え。

#### \*人間の難儀さを見る信心の目

一つ、十円の金子はきげんようやれ、とお知らせ。心の鬼に身を責められて難儀、親に心配させ。やけは貧から。末の難渋。わが妻子に難儀させ。病気づき、動きも這いもならぬ時はどうする。ぜひ役場突き出し、生まれ所へ送りつけられ、親兄弟も喜ぶまいが。考えてみい。親も神も同行(同様)。かわいいからみんなに理解いたし。聞かん者はしようがなし。金光正神こと。(覚帳 22-4)

鬼は外から? ←→鬼を住まわせている、その心は自分

一子大神、せがれ正神につき、五、六年こちら病気。おいおい身がやせ、腹は大きくなり、気分折節悪し。天地金乃神様たびたび親子へご理解あり。親子ともにそむき、母は身の弱し難儀、子は金子につき身の難儀。当七月には使い下女につき格別の心配。金子につき親兄弟までに心配かけ。いたしかたもなし、わが心ゆえ。(覚帳 23-1. 8)

#### \*どん底での救いの希求—ドストエフスキー『罪と罰』から

ただ万人を憐れみ、万人万物を解する神様ばかりが、われわれを憐れんで下さる。神は唯一人で、そして審きに当たる人だ。最後の日にやって来て、こう訊ねて下さるだろう。『意地の悪い肺病病みの継母のために、他人の小さい子供らのために、我とわが身を売った娘はどこじゃ? 地上にすんでおったとき、酔っぱらいでやくざものの父親をも、その乱行をもおそれずに、気の毒がった娘はどこじゃ?』それから、こうもおっしゃるだろう。『さあ来い! わしはもう前に一度おまえを赦した……もう一度おまえを赦してやったが……今度はおまえの犯した多くの罪も赦されるぞ、お前が多く愛したそのために……』こうして、娘のソーニャは赦されるのだ […] 神様は万人を裁いて、万人を赦される、善人も悪人も、智慧ある者もへりくだれるものもな […]われわれが臆面もなく出て行っておんに立つと、神様は仰せられる。『なんじ豚ども! そちたちは獣の相をその面に印しておるが、しかしそちたちも来るがよい!』すると智者や賢者が言うことに、『神様、何ゆえ彼らをお迎えになりますか?』するとこういう仰せじゃ。『智慧ある者よ。わしは彼らを迎えるぞ。賢なる者よ、わしは彼らを迎えるぞ。それは彼らの中の一人として、自らそれに値すると思うものがないからじゃ……』(第1編—2. 米川正夫訳、新潮文庫、昭和53年、上巻37~38頁)

## 2 布教困難続く

\*警察の取り締まり (明治9年)

旧8月29日 「神のことたずねられ。人を助けることはよし」 (覚帳 20-20-1)

9月7日 「医師のこと言い立て、神のことむつかしゅう言われ」 (覚帳 20-21-2)

9月12日 「供え物、初穂取るな。取らずに拝んでやれ。取れば、なわかけて連れていぬると申され。」 (覚帳 20-24-1)

明治10年

旧1月3日 「きょうは屯所へ連れのうちて行く、支度せいと申し。警察官吏。拝むことならん。」 (覚帳 21-2-1)

1月19日 玉島の役所や警察の指示で「説諭だけいたし候。金神お廃しと申し、天地金乃神書付出されんと萩雄申し候。書付延引いたし。」 (覚帳 21-4)

一つ、金光大神、人が小便放りかけてもこらえておれい。神が洗うてやる。人がなんと申うてもこらえておれい。天地の道つぶれとる。道を開き、難渋な氏子助かること教え。日天四 月天四 金神をどうなりともしてみいと申しておれい。(明治9年旧6月24日、覚帳 20-16)

「神が顔を洗ってやる」は、神の保障とも言えるが、神も一緒に辛抱する、との思いか。開き直りとも見えるほどの、嘆きと憤り。

## 3 生神金光大神の使命と姿勢

### i 総氏子のこと

総氏子のこと、素人、玄人と申すことなし、大人、子供、鳥畜類にいたるまで、人間が無礼いたす、当たりいたし。同じく氏子から断り申すこと天地乃神が教えてやる。取次が生神金光大神、教えそむく人はしようもなし。教導職ではいけん。教導にまぎらわしきことせず、まじないもせず、説教も。出て歩く道でもなし。内で説諭とも理解とも話をして聞かせ。末を楽しみ。(明治13年旧6月25日、覚帳 24-5-3~6)

\*神の眼から眺め渡され、天地の側から捉えられた言葉

\*人間誰もが何かに対して責めがあること—「大人、子供、鳥畜類にいたるまで」と、より弱いものへ

\*「氏子から断り申すこと」を神が教える、その「取次が生神金光大神」。「教えそむく人」も

〈参考〉

親は、心配さす不肖な子ほどふびんであろう。天地の神様も、神の心を知らずにいる者ほどかわいいと仰せになる。(理解Ⅱ類Ⅱ佐藤光治郎 3-1)

\*金光大神のなすべきことは「説諭」と「理解」

明治10年頃、かつて制約として課された「説諭だけ」が、「それしかできない」から「それさえあれば」に。

## ii 人代と神代

一つ、お知らせ。人代と申し、わが力で何事もやり。今般、神が知らしてやること、そむく者あり。神の教えどおりをする者は神になり。昔は神代と申し、今は人代。昔へもどり、神代になるように教えてやる。難儀はわが心、安心になるもわが心。（明治13年旧11月24日、覚帳24-25）

### \* 「わが力」の問題

### \* わが心と和賀心

父も私も気性が荒く、いつも意見が合わなかった。その時も何かのことで争い、参拝したところ、金光様はお書付（天地書附）をくださり、「おかげは和賀心にあり」について、「和はやわらぐで、賀は祝賀の賀である」とご理解をしてくださった。（理解Ⅱ類角南佐之吉8-1）

・柔軟性と寛容性：長部日出雄「世にもめずらしい宗教」（『現代のこころ 金光教』、旺文社）

## 二、安心への導き

### 1 神の教えを守る

一つ、金光大神社でき、何事も神の理解承り、承服いたせば安心になり、神仏とも喜ばれ。親大切、夫婦仲ように、内輪むつまじゅういたし候。（覚帳15-12-1）

### \* 「承り」と「承服」の間

〈参考〉教えがむずかしいのか自分がむずかしいのか

教えを承って信心をすすめると言うことは、教えの中身が生活に現されることになるためのものであって、信心とはそのことの稽古を繰り返していく、そういうことであろうと思うのであります。ところが教えを承ってまいりますとき、教えが実際にむずかしいのであるのか、教えを聞こうとしている自分がむずかしい人間であるのか、そこのところをハッキリ識別、認識することがいる。（中村学『寸草の信』18頁）

### \* 金光大神と参拝者の間で一惹きつけつつ突き放し、突き放しつつ惹きつける

「津川さん、あなたもよく堪忍なさる。神様が感心しておられる。それでなければならぬが、もう一つ進むがよい」「はい、どのようにでございますか」

「あなたは、腹が立ってもこらえてこらえて、それを腹の中へおさえこんでおられる。それではわが体をこわす。もう一つ進んで、腹の立つことを知らないということになるがよい。それには、悪いことがきても、『これは自分が犯した罪のめぐりか、先祖が犯した罪のめぐりであろう。これで、一つめぐりを取り払ってもらおうのだ』と思うがよい。また、それに相違ないのであるから」と言われた。恐れ入った。そして、困った。なかなか信心はできるものではないと思った。（理解Ⅱ類津川治雄20）

腹を立てずよく堪忍していると褒める言葉→更に進んで腹が立つことを知らないようになれ→そのための心得を重ねて説き聞かす。その最後に「～と思うがよい。また、それに相違ないのであるから」=金光大神その人を通して、天地の道理が厳然

と→「なかなか信心はできるものではない」→絶対的なもの、有無を言わせぬものに直面し、突き放されるようにして、また引きつけられるように、神や道理に導かれる

\*「仰せどおり」の姿勢—内田守昌「金光大神の対応の姿勢」（『金光大神を頂く 教義研修会講話集』、金光教北九州教務所）

## 2「理解」で説かれる「安心」

\*うそのなさ—実意な真心をもって→神任せ

「天地金乃神と氏子の間柄のことを、金光大神、参って来る氏子に話して聞かせよ」とお伝えくださったので、このように話をしておるのである。金光大神の話す教えを聞かずに、方位方角を用いてゆこうとして困る人がたくさんあるようなが、金神の留守をねらうことをやめて、一心に頼むと心を改めて、実意な真心をもって安心に世渡りをする人が、気楽でよろしいではないか。 […] この広前に参って金光大神の話聞き、天地金乃神様を一心に頼み信心する人は、親類の内でもよろしい縁組みを調べ、方角は言わずに神様任せの信心して、安心に働く人もたくさんあるようになった。（理解Ⅰ類山本定次郎 48-3・5）

・嘘がないだけでなく、自分が騙された時でも

この人をにくいと思わず、かわいいと思ひ、二反の田地やってしまう気になれば、夫婦安心になるように願ひ。無理には言わんぞ。夫婦相談いたし。このうえ人に交わりて、にくいと思うと入用入れ損。妻未生まれ、神はかわいい。此方が立てば扶持方送りてやる。氏子助けやる心になり、とお知らせ。（明治10年旧11月24日、覚帳 21-38-4～6）

\*安心と慢心

信心の油断をしておかげを取りはずすのは、飲み食いで安心しており、次の支度をせず、さっそくに困るようなものである。（理解Ⅰ類山本定次郎 43-4）

\*死生の安心

世間に、死ぬるのがつらいと言うのは、まだ、死ぬるのをいとわぬだけの安心ができておらぬからじゃ。ご信心して、早く安心のおかげを受けておかねばならぬ。（理解Ⅲ類尋求教語録 23-2）

ますます、ありがたしと信心していたが、明治八年九月に参詣した時に、金光様が、「丑の年（須喜）、親のもちかえはできぬものじゃからのう。親を大切にしなさいよう。来年の四月二十一日には丑の年（利喜三）が安心のおかげをいただくぞ」と仰せられた。（理解Ⅰ荻原須喜 8-1）

続いて、「みな、死ぬるのを嘆くけれども、月でも雲が隠すことがある。二十日が過ぎれば、二十四日が安心のできる日である。ここ七日の間を大切にせよ」と仰せられた。（理解Ⅱ類近藤藤守 55-3）

### 3 祈りのかたち

#### \* 祈りの姿に触れることで祈られているという安心感

〈参考〉小川洋子『人質の朗読会』（中央公論新社）「第七夜 死んだおばあさん」

バッターボックスに入った時も、ピッチャーとサインを交換している時も、ベンチで声援を送っている間もずっとおばあさんの祈りを感じていた、と青年は言います。実際おばあさんの姿ははるか遠く、ほとんど黒い粒のようにしか見えませんでした。他の観客たちに隠れたその一点に、ただひたすら自分の無事を祈ってくれている人がいる、という事実だけは動かしがたいものでした。しかも彼女の祈りは孫がヒットを打ちますように、試合に勝ちますように、などという薄っぺらなものではありません。もっと大きな無事、試合に出ている子も補欠も味方も相手方も監督も親兄弟も見物人も、ここに集まった人々が皆無事であるように願っているのです。「たった一人、あそこにおばあさんがいる、と思うだけで安心だった……」青年はバッティングセンターの金網の向こうにいるおばあさんを捜すような目で言いました。（178～179頁）

#### \* 願う氏子

「願い」（願望・希望・欲望等々）→足を運び、時間を使い、手を合わせ、頭を垂れて念じるという姿形をとって「願う」→願う行為が繰り返され肌身に染みついた「願う氏子」に

〈参考〉『出川真澄講話集 信心・その深遠なるもの—無始無終の世界—』

正真氏子の願礼場所 ①そこへ参れば、おのずからお礼の心が生まれ、自ずからお願いする心が生まれる所。②次いで推せば、茫々として盲目たる人が参っては、その心を開かれる所。③似せ物が参って、自然に真実となっていく所。④参ってはわが真実の足らざるに気づかしめられ、いよいよ信に立ち帰らしめられる所。この四つは同じことなのですが、分ければこうなる。なんぼうも難儀な氏子に会うは、信心による。信心とはわが心が神に向かう、そのことを具体化して広前となる。（176～177頁）

### 三、試しと証し

#### 1 神の臨在

一つ、金光桜丸、父三十三歳厄晴れ、父の身代りに立ち。なんと神というものはこういうものか、えらいものじゃのうと申すように、先を楽しみ。（覚帳 25-23）

#### \* 孫の死と「身代わり」

そのことが実感される「先」へ向けて、「楽しみ」とするように、また将来には神の計らいと働きとが、感嘆を以て受け取らしめられることもあるということ

\* 世間では「群盲、象をなでる」（部分しかわからず、全体が見えない）の諺、しかし、たとえ部分であっても実際に触れて体感することが大切。

\* 「なんと神というものはこういうものか」という経験—金光大神の生涯を貫くもの、そして一人一人にも

\* 先を楽しむ—神と共に、祈りをもって生きる姿

ある先生の「信心辛抱—神人辛抱（神、人の辛きを抱く）」と感じた体験

## 2 天地への依拠

一つ、書付やるを見合わせ。書くことは兩人に書かせ、ためおき。ほか守り札、無理から言う者には金光明神に出させ。萩の所へ行けと申し。此方には、氏子の身信心の話だけいたし、聞かせ。天地へ身を任せば、難なく安心のこと。（明治14年旧12月2日、覚帳25-36）

\* 三つの指示

①天地書附の下付をいったん中止し、息子二人（萩雄・宅吉）に書きためさせること、②守り札を、無理に申し出る者には萩雄の社務所に出させること、③金光大神は「氏子の身信心の話だけ」するように。

CF「此方には拝まいでもかまわん。守り札出さん。書付だけ出せい」（覚帳22-34-3）

\* 天地書附とお札

・お札は目当てにすぎず（理Ⅱ津治3）、一心が大切で心が伴わなければ意味がない（理Ⅰ市二61・島八18・松敬12-1・山定64、理Ⅱ佐彦1-1）、神のお守りを頂けばよいから札はいらない（理Ⅱ古こ2）、貧しい者が助からない（理Ⅱ国三6-1）、売り買いに使われるとよくない（理Ⅱ市光5-1）、信心が廃れると御粗末になる（理Ⅱ吉芳1-3）などの理由で戒め

・天地書附は「よく見える所へ張って」おき「書いたとおりを忘れずに」（理Ⅰ近藤18）と諭され、信心の「目当て」（理Ⅰ市二57-1）であり「心の守り」（理Ⅱ福儀17-1）であると。

・教祖広前では、明治11年の一時期、木や紙の札が備えられ下付されたが、推進役であった人物の事情により中止。また明治9～10年、警察の取締りが厳しかった頃、「説諭だけ」（覚帳21-4-1）となり、天地書附を出せなかったことも。

・当時の実状：札を求める参拝者。天地書附を頂いた者が、併せて札をも受ける例。「金銭でこれを売買してはならない」（理Ⅱ福儀6-2）との戒めも。

\* 「天地へ身を任せば、難なく安心のこと」

・「願う」と「任す」

・「任す」の本義—任し得ぬものを任す

・「難なく安心」と「難あって安心」

金光大神の生涯において、困難に際して幾度も示された。

「私は心実正、神仏へ身任せ」（安政2年4月26日、覚書3-4-2）—「九死一生」の時の心の構え。「良し悪しし、神任せにいたせい」（明治6年旧1月20日、覚帳17-1-3）—布教差し止めが迫る状況で、前もっての神の諭し。

・「身を任す」ことの積極性—受動と能動

### 3 無限なるものの中に

一つ、金光大神、子供、孫のこと願ひ。何事も巡り合い。病気は時々にてきても、治ること願ひ。何事ありてもびっくりすな。日天四がおる間は苦世話にすな。親のようなもの。子供が、親がおればよかろうが。天地金乃神がおらぬようになったら闇。日天四が死ぬることはあるまい。万劫末代、代々子孫繁盛願ひ、とお知らせ。（明治15年旧2月4日、覚帳26-3）

#### \* 願ひの射程—家族、子孫のこと

〈参考〉2週間後に宅吉の長男撰胤が病気に罹り一ヶ月に亘り一進一退を繰り返すという出来事があった。前年には2月にこのの出産（死産、覚帳25-2）、閏7月には萩雄の長男桜丸の死（覚帳25-22）。一方で、新たな命の誕生。前年旧11月に宅吉の長女ひふのが誕生（覚帳25-35）、このお知らせの数日前には萩雄の長女式子が誕生（覚帳26-2）。更に10月には、このが長女逸恵を出産することになる（覚帳26-23）。

#### \* 金光大神の死の迫りと、残される者のこと

- ・明治9年頃から「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が九日十日と連れ合っていく時がある。その時には神上がりする」と語っていたという。（理解Ⅱ類伍賀慶春21）
- ・案じられる子供、孫の行く末と、神の守護
- ・死ぬことのない神と、その逆の金光大神とが、同時的に暗示される。

#### \* 天地の巡り行きの中で、変わるものと変わらぬもの

変転しつつ続いていく大きなものの予感。時は巡り人は変わり、天地が循環し続いていく中で、お知らせの底を流れるように「神はいる」、「願え」と繰り返され、願う本人たる金光大神の生死を超えて願われるべきことの知らせ。

#### \* 生き続ける祈りへの信—まだ顔を見ることもない子孫たちのこと

#### \* 額づく姿勢—広前にあって、そして天地の中で祈念する金光大神

#### \* ある先師の姿—最後に残るもの